

チャールズ・ウェスレー
シンポジウム

司会 坂本 誠
馬淵 彰

パネリスト 岩本助成氏（元大阪キリスト教短期大学学長）
北村宗次氏（前日本基督教団神戸栄光教会牧師）
深町正信氏（青山学院院長）
山内一郎氏（関西学院理事長）

司会者（坂本）：ただ今より、公開シンポジウムを開始させていただきたいと思
います。まず各パネリストに発表していただき、その後パネリスト同士の発題
をさせていただきます。フロアでご質問がある方は、お手元の質問表に書い
て提出してください。後にフロアからの質疑応答の時間を持ちます。それ
では早速、岩本先生からご講演いただきたいと思ひます。岩本先生からは、チャ
ールズの人物像に焦点をあてて発表していただきます。

岩本氏：阪神タイガースであれば鳥谷選手が一番バッターであります、年寄
りが出てきましてご心配の向きもあろうと思ひます。最初に総括をしたいと思
ひます。この講演のご依頼を受けまして、私はチャールズが全くわかっていな
かった、今もわかっていないということが分かりました。チャールズのことを
考え、二つの印象を持ちました。時間が無くなってそれが言えなくなるとい
うに、初めにそれら二つの印象をお伝えします。

第一の印象は、チャールズは面目躍如としたウェスリー一家の一員だとい
うことです。自由人、自立人、この人をこそ成熟した人間というのだろうとい

象です。自由人ということは、勝手気儘ということではなくて、非常に寛容な
人だということであります。チャールズは、自分の家族に対しても、また、国
教会・非国教会を問わず、すべての人に対して、寛容で、柔和でした。彼は、
兄ジョンやその妻、また、カトリックとなった息子などを可能な限り受け入れ、
隣人への愛・ホーリネスに生きようとした人物であったと思ひます。将来の展
望や、その展望に照らし今どこのようであらねばならないのかといった彼の判断
は、兄ジョンよりも適確であったのではないかという印象を持ちました。教会
についても、結婚についても、かなり適確であったように思ひます（ただこれ
は、正しいか間違っているか、良いか悪いかということと関係ありません）。

二番目の印象は、メソジスト派出身のジェームズ・F・ホワイトの言葉を借
りるならば、チャールズは、詩の形でキリスト教教義を書いた人だとい
うことです。韻文で表現された神学論文という思ひがいたします。退屈きわまりない
説教臭さもない、詩の形でそれを為しとげた。私は英語が苦手ですので、イ
ギリス人の語学の先生について二年間勉強し続けています。その先生が、チャ
ールズの詩を「ああ、素晴らしい」というのですが、その「ああ、素晴らしい」
というその素晴らしさが、私はわかりません。しかし、現代のイギリス人をして
も、感嘆させるという内容の言葉なのでしょう。シンポジウムの前の集会で
水野先生もおっしゃいましたが、チャールズの詩の言葉は聖書そのものです。
私がインターネットでキング・ジェームズ・ヴァージョン（『欽定訳聖書』）の
引用についてのサイトを開き、そこでチャールズの詩の言葉を検索すると、必
ず聖書箇所がインターネット画面上に出てくる。

彼は、**6,000** ぐらいの数の讚美歌を作ったと言われます。**9,000** 作ったとい
う人もいます。その数を数えた人もいます。これだけの数の詩の言葉が溢れ出
てくるということは、すごい。私たちの場合、何が自分自身から溢れてくるで
しょうか。私たちの思ひは何でしょう。 **pen and ink** あるいは **pen and paper**
とチャールズは絶えず言っていました。つまり詩が思ひ浮かんでくると、すぐ
にそれを書き留めようとしていたのです。しかし、彼自身から溢れ出てきたも
のは、聖書の御言葉だったのです。

チャールズの詩が果たした貢献は、これからも再発見・再認識されると思
ひます。それまで長い詩編歌を歌っていた会衆や、教会と縁がない貧しい人々が、

生き生きと讚美の詩と曲とで嬉々として歌っている、そのような集会の模様が、目に浮かんできます。ジョンの日記によると、ジョンがある場所に行ったら、会衆がマカリウスによるヘンデルの曲を歌っていたというのです。調子はずれの人もいたようですが、大体綺麗に歌っていた。会衆が説教者を待ちながら、讚美する人々の様子が分かります。

さて、今回のシンポジウムでの私の役割は、チャールズの人生を辿ることです。

彼の人生の最初の区切りは、チャールズの誕生から彼のペンテコステの日までです（回心と表現するのは自由ですが、彼自身はペンテコステの日と呼んでいます）。この三十年間を、彼の人生の第一期として考えます。

彼は、エプワースの司祭館で第十八子（または第十九子。これはよく分かっていません。）として生まれました。二ヶ月早い早産児として、難産の末に生まれました。十七歳年上と四歳年上の兄がおります。三人ともアングリカンの聖職者となりました。チャールズという人は、何かと父親譲りだったと思います。顔もよく似ています。母親のスザンナは、チャールズの為に過ごす時として、土曜日の晩に二人だけの時間を持ちました。

九歳の時、400人程のわんぱく小僧がいるロンドンのウェストミンスター校へと進みます。兄のサミュエルがすべて学費を出し、また、サミュエルはウェストミンスター校の先生でした。チャールズはこの一番上の兄（十七歳上の兄）に、生涯頭があがらなかったと思います。チャールズは秀才であり、よく勉強ができました。ですから、生徒会長となったり、宮廷からのスカラシップを受けたりして、クライストチャーチ（オックスフォード大学）に進んでいきます。彼の友人の印象では、兄ジョンを何故あんなに立てるのだろうか、ジョンをそこまで立てなくてもいいのにといいほど、チャールズはジョンを敬愛していました。

チャールズは、学者か詩人、あるいは文筆活動で生きようとしていました。しかし、父親は、「私は見ることができなかったが、あなたは自分の目で信仰復興（リヴァイヴァル）を見るだろう」と預言しながら死んでいきます。その通りになります。インディアン伝道への兄ジョンの熱意に促されて、アメリカ渡航前に急遽、本来は二年かかるところを、十日間で補祭（ディーコン）、そし

て司祭（エルダー）になるという、例外的な挨拶を受けて聖職者になりました。彼は、聖職者であることに非常な重荷を感じるようになります。

アメリカでは不運の連続でした。十四ヶ月の旅路の半分は、嵐の多い航海でした。しかし、この兄弟のアメリカ・ジョージア植民地伝道は失敗だったとは思えません。もしこれが失敗と言われるならば、私たちの伝道者としての失敗も同様に問われるでしょう。ちなみに、チャールズは、英国へ帰ってからも、秘書（事務）として再度アメリカへ行けというならば行かないが、しかし伝道の為なら今すぐにも行くと語っています。このように語る伝道熱心な兄弟を、伝道の失敗者と名付けることは出来ません。

そして、帰国後のチャールズは、ペンテコステの日（1738年5月21日）をリトル・ブリテンの、オルダスゲートの近くの知人宅で（兄より三日はやく）迎えるのです。

彼の人生の第二期を、ペンテコステの日から1749年の結婚までの十年間と考えます。

1738年と1739年、チャールズは、兄ジョンを助けながら、彼はやりたくなかった即席説教を行います。初めて原稿を持たないで説教しました。我々自身の説教と比較したらいけないと思います。たとえば、ある文筆家は、一行も訂正しないで執筆していきます。その文筆家は、もう文章が頭の中に出来ているのです。それを文字にしますから、文字を一字も変えられない。つまり、彼の頭の中では文章がきちんとすでに出来ているのです。私たちの即興説教と一緒にしたら気の毒だと思います。

チャールズは、聖別された聖堂でも、また、野外でも説教を行いました。宣教の多様性に彼は気づいていきます。信徒説教者の採用には生涯批判し続けたのですが、目を開かれた面もあったと思います。頭があがらなかった長兄サミュエルが病気のため四時間で急死するという悲しい出来事に、チャールズは遭遇します。彼は、兄ジョンが不在のロンドンやブリストルでの伝道を支えながら、ジョンと交代してソサエティを巡回いたします。

彼がかかわった讚美歌曲集、讚美歌集、詩曲集については、お手元の配布資料に記してあります。特に1745年の、166曲からなる聖餐讚美歌集は注目に値すると思います。

チャールズは、ウェールズ伝道でサラ・グウィン(Sarah Gwynne)という女性に出会います。ウェールズ人ですから、言葉が違いますよね。イングランド語とウェールズ語で違うのです。ウェールズは、音楽性の豊かな国(地域)じゃないでしょうか。現代のイギリス人でも、「私はウェールズ人ではなくイングランド人だ」と言います。また、「私はウェールズ人ではない、ましてスコットランド人でもない」とか、「私はイングランド人ではない」とか。同じ国の中でそういう事があるのです。チャールズの妻は、ウェールズの方です。十八ヶ月の交際期間で結婚します。結婚時、チャールズは四十二歳、サラは二十三歳。結婚についてもおもしろいことがあります、その事を話していると時間がありませんので、三番目の時期に移ります。

第三期は、結婚から最後の北に向かったの旅行までの数年です。

この期間では、信徒説教者やヘルパーの採用について、彼はジョンと激しく対立します。メソジスト運動は、聖餐執行の重要性を強調します。教職者が聖餐を執行することが前提ですが、信徒でも聖餐を執行しても構わないのではないかという意見もでてきます。ウェスリ兄弟が礼拝を重んじたため、信徒は国教会の礼拝に出席しますが、そこではメソジストに対する攻撃がどんどんなされるのです。嫌気がさして礼拝から戻ってきて、チャペルでのメソジストの集会時にその非常に嫌な出来事の感想を述べ合うのです。そのこともあり、信徒を採用して教職者不足を補おうとしたのです。チャールズはそれらの動きに反対します。

もう一つ問題があります。ジョンとチャールズのやりとりを見てみると、信徒伝道者の生計の負担という問題がでてきます。伝道者の家族にまでおよぶ経済的問題である生計の負担の問題とは何かというと、このことでジョンがすべての決定権を持つのではないかということです。いわゆる専制政治的なものが教会の中にでてくるのではないかと、チャールズは一番心配するのです。

1788年の死までの三十年間、チャールズはメソジストの群れの為に労していきます。しかし、巡回伝道からは徐々に遠ざかっていき、自分の家族を第一としたロンドンのメルボーンの自宅中心の活動を展開します。トコトコと背の低い馬にのって、大きな幅広の帽子をかぶって、ブルーのコートを着たチャールズは、メルボーン周辺では有名だったそうです。この地で、子どもたちや孫に

よる、音楽一家が成長していきます。

メソジスト派独自の按手は国教会からの分離につながると言われます。チャールズは、国教会を第一に重要なものとし、メソジストは第二のものとして位置づけました。しかし、彼とは違い、メソジストを第一、国教会を第二とした兄ジョンは、1784年、特別な事情のもと、北米のメソジスト派のために按手札をメソジスト派独自に執行します。チャールズは、国教会聖職者としての生も死も選び、死後には国教会によって聖別された場所に葬られました。兄のジョンは、ニヤッと笑って言います。「聖別された教会の土地は何フィート下まで聖別されているのですか」。

チャールズの死後だいぶ経ってからですが、ヘンデルがチャールズの三つの讃美歌に対してつけた曲が 1825年に発見されます。そのことを水野先生もおっしゃっておられました。

チャールズが最期を迎えた際に、サラに書き取らせた言葉を紹介して終わります。次の言葉を書き取らせました。拙い私の訳でごめんなさい。

「年老いて弱り果てし身 助けなき虫けらを贖いたまは誰ぞ。

イエス、汝こそ我がただ一つの望み 欠けに満てる我が身と心を強め給え
汝のほほえみを受け止め とこしえの休みへと入れさせ給え。アーメン」

本当に面目躍如と申しますか、そのような思いがいたします。

配布資料の最後に二つ紹介したのですが、これは、皆さんご存知だと思います。今年 11月アビンドン社から、彼の手稿のマニュスクリプトの日記がでます。今私たちが持っているものはジャクソン版です。ジャクソンは気に入らない所は全部カットしました。そのような手荒な事をやったことが、明らかになっています。それからオックスフォード大学から書簡集(二巻)がでます。1,000通近くのもので、チャールズ・ウェスレーの生誕を記念して、**Charles Wesley, Life Literature and Legacy**という本がでました。二十八編の世界的な学者の論文が出ています。2001年、彼の説教集が二十三編で出ましたが、これはクリティカル・エディションでした。

司会(坂本):続いて北村先生に礼拝と讃美という視点から講演をいただきたいと思ひます。

北村氏：私は身近な讃美歌を手掛けていまして、讃美歌をたくさん残していたチャールズのことをどのように理解したらいいのかということをお願い、考えるきっかけをお話ししたいと思います。三枚レジメをつくりましたので大体その線で考えていきたいと思ひます。チャールズ・ウェスレー生誕300年記念の年にあたり、彼が遺したものを考えてみたいと思ひます。

彼の遺した最大のもの、数多くの讃美歌です(私は6,500としたのですが、いろいろ数え方があります)。多くの讃美歌集をみると、一人の人が作詞した讃美歌の中で、最も多くチャールズの讃美歌が歌い継がれていることに気づきます。たとえば、身近な、今日も使いました讃美歌21(1997年)には、15編のチャールズの歌が入っています。一人の人が作ったものでこれだけ入っているのは、やはりナンバーワンです。昨年の暮れ、日本聖公会が聖歌集を出しましたが、そこには13編チャールズの歌が入っています。日本ではそのような状況ですが、イギリスで、私が生まれて間もなく発行された1933年版のメソジスト・ヒムブックには243ものチャールズ・ウェスレーの讃美歌が含まれていました。ジョン・ウェスレーのは少なくなるのですが、25編載っています。イギリスの讃美歌でさつき水野先生も紹介された1983年のHymns and Psalms(讃美歌と詩編)ですが、156ものチャールズの曲が載っています。わりあい身近に感じています、アメリカのメソジスト教会の賛美歌集が1989年に出ましたが65編、チャールズの讃美歌が入っています。これは、メソジスト系だけでなく、英国の長老系の教会も使っています。Church Hymnary(Third Edition)には日本の讃美歌に近い19編も含まれているという現状があります。

ジョン・ウェスレーの讃美歌はほとんど見当たりませんが、水野先生が言われたように、ジョンはチャールズがたくさんつくったものを編集するということが功績があったのです。今、岩本先生がご紹介になったリストの中で幾つかの讃美歌集があります。それを紹介するだけでも講演ができるのですが、ジョン・ウェスレーがそれを踏襲したということで覚えられなければならないのです。

そして、またこのパラグラフの下に書いていますが、ジョンが会衆讃美歌の指針七項目をあげたのも重要です。開会礼拝でもその骨組みを使用していまし

た。英語の讃美歌集などにはそれが載せられています。本日も文章が紹介されておりましたね。

特にチャールズ・ウェスレーの数多くの讃美歌において基本的に考えておかねばならないものは、岩本先生の紹介の最後にもありましたように、彼ら(特にチャールズ)が終生アングリカンの司祭として生き抜いたことです。チャールズの礼拝生活の基本にはアングリカンの理解と実践がしっかりと根付いていたということでもあります。これは後でまた取上げたいと思ひます。

サクラメント・聖礼典の為の歌詞は少ないと言われるのですが、アングリカンの司祭としての生涯を貫いたウェスレー兄弟にとっては、その必要を認められないとも思ったのですが、しかし、それにもかかわらず、岩本先生からも主の晩餐(Lord's Supper)に関する讃美歌を出したという紹介がありました。それをまとめたものを留学した時に見たことがあります、650編ほどあります。Eucharistic Hymn(聖餐のための讃美歌)は全体からすれば10分の1かもしれませんが、他の人と比べれば比較にならないほどたくさんそういうものを遺しているのです。

しかし、ウェスレー時代におきましては、アングリカン教会の聖礼典を含む共同礼拝と、教会のこの世に対する福音宣教のあり方について、神学的に実践的にどのような状態であったかについて検討されなければならないと思ひます。どういうきっかけで話すことがいいたろうと依頼を受けてから考えてきましたが、配布資料の三行目にありますように、我々が生きてきた時代、私も牧師として生きてきた時代、20世紀の後半にあって、同じ英国のアングリカンの中にあつては、J.G. DavisがWorship and Missionという本を出しました。これはセンセーショナルな話題を呼んだものでありますが、それが1年あまりで邦訳されました。私の同僚でもありました、岸本羊一先生が、『現代における宣教と礼拝』という訳題で出しました。原文はWorship and Missionです。Worship and Missionであつて、Mission and Worshipではないとデービスが強調しているのです。そしてその訴えたことが18世紀にもあり得たのではと推測します。その課題の一つの解決が、チャールズ・ウェスレーの讃美歌の創作、それも歴史的にも比類なき多作によって、問題提起と共に、解決と実行への道が開かれたと考えることができるかもしれないと考えられています。そのような考えが正しいのか、

先生方のご批判やご意見をいただければ幸いです。

「メソジストは歌の中で誕生した」と、たびたび言われます。これは 1933 年版の英国メソジスト教会の讃美歌の序文に書かれています。英語では **Methodist was born in song**。この五つの単語で単純に言い表されているのです。そう言われる時は、実際にはチャールズの讃美歌によるところがほとんどであり、メソジストの讃美歌作者ではチャールズが飛び抜けているのですが、彼だけではないということも忘れてはならないと思います。

その中で、礼拝と宣教をつなぐところに、讃美歌がより正しい、より健全な形で取り入れられているかが、我々にとっての課題として残されているのではないか。ただチャールズ・ウェスレーの歌は良い歌だから歌うだけでいいのかということ。その一つの重要な課題は、教会の人々と礼拝をどのように共に受け止めるかという自覚を持っているかという点でありましょう。現代にとりましてはアングリカンに帰るといような短絡的なことは考えられないでしょう。エキュメニカルな時代であります。それぞれの教会で礼拝の形成、礼拝の形成という時に **The Shape of the Liturgy** というものすごく分厚い本があります。1945 年、我々にとっては敗戦の頃、アングリカンのグレゴリー・ディックスという人が書いた書物です。礼拝の形成 (“**The Shape of the Liturgy**”)。共同の礼拝を形成するという神学の確立が望まれるところだと思います。そのこととあいまって、チャールズ・ウェスレーの讃美歌が評価され、積極的に採択されることが期待されることでもあります。

「メソジスト神学を具体的現実的に具現しているのはメソジストの讃美歌集であり、殊にその中にあるチャールズ・ウェスレー自身の讃美歌そのものである」。チャールズ・ウェスレーの神学を紹介する為の一つの適切な言葉である。チャールズ・ウェスレーの神学を理解する為に必要なことは、それが讃美歌にあらわされた神学 (**theology as hymn**) を理解することです。特に、チャールズ・ウェスレーの神学は、それを人が歌うことのできる神学 (**theology one can sing**) である。この意味によって、それは、人が賛美することのできる神学、神の栄光の為の神学といわれます。ともかく賛美できるような神学を彼は求めたのです。またそれによって、祈ることの出来る神学です。これは礼拝で話されたスピリチュアルということに通じるかと思いますが、それによって教える

ことのできる神学、それによってキリストの実存について最終的な希望を人に持ちはじめさせ、導き、心に描く (**envision**) ことの出来るような神学なのです。これはアメリカのデューク神学校のラングフォードが引用しているのですが、そこにチャールズ・ウェスレーの詩人であり、神学者であるという特徴をこういう言葉で表現できるのではないかということで紹介させていただきました。

お手元の資料の 2 頁の最後ですが、もっと多く書きたいことがあるのですが、これだけ引用しました。「歌集にも採用され、愛唱されたチャールズ・ウェスレーの讃美歌を見ると、共同の礼拝そのものの為の歌詞は少ない」。これは何を言っているかといいますと、誤解されやすいのですが、さっきの **Shape of the Liturgy** ではありませんが、キリスト教の長い歴史の中に形成されてきた礼拝というもの、たとえばカトリック教会で通常文と呼ばれるものと、固有文というものによって礼拝の中のことがかためられているのですが、通常文というのは合唱をなさる方はご存知のように、ミサの通常文ですね。キリエ、サンクトゥス・・・というようなものです。それが骨組みになって、固有文がその日曜日ごとの、今こういう祈りをささげよう、こういう聖書を読もう、というそういうものがあります。さらにその通常文を靈的に補うようなもの、これは、実はローマ・カトリックだけでなくアングリカンの教会にも受け継がれてきていたのですが、その中でチャールズも生きていたのです。生涯の最後になっても、アングリカンの司祭であり続けたいと思っていたのです。そこに基礎があるのです。それを展開させ、人々の心に、教会の中に根付かせようとして、作られたのが彼の讃美歌です。ところが愛唱され、受け継がれている讃美歌の中にそういうものが少ない。これが讃美歌編集にかかわってきた私にとってははっきりわかっていることです。ですから共同礼拝そのものの為の歌詞は少ない。それは誤解せずに受け止めていただきたいのです。礼拝ではウェスレーの讃美歌を歌っているのではないか。礼拝で歌っているじゃないかと言われますが、礼拝そのものの、さきほど言いました、通常文や固有文、さらにそれを展開したものを利用して作られたものが多いのです。讃美歌 2 1 の中では 88 番に派遣の歌があり、かろうじて入れられました。これは、讃美歌 2 1 の編集委員会の委員長を務めていましたので、そういうことは判っていたのですが、辛うじて一つ入りました。「心に愛を豊かに満たし日ごとの業に遣わし給え」。これのも

っと展開したものは、今日の礼拝の最後の歌でもありました。それから昨年出版されました聖公会聖歌集の281番、入信、献身の歌として「聖霊降りてきよき日迎え」という歌があります。礼拝の中で、カトリックでもアングリカンでもそうですが、特に西方教会が欠けてきたのは、正しい意味で聖霊を求める祈りです。そういう歌がチャールズ・ウェスレーによって作られていたのです。それを聖公会が、「聖霊降りてきよき日迎え」という訳詞で取り入れています。

もう時間になりましたから終わりますが、3頁目に紹介したのは、ユーカリストの歌、聖餐の讃美歌が650も作られていたのですが、英国の讃美歌集にもアメリカの讃美歌集にもあまり見当たりません。ここで3頁に紹介したものが、8編とか6編とか、少しだけ入っています。しかし日本の讃美歌には一つもない。それは讃美歌編集にかかわってきたものの課題として残っています。これは、水野先生も話されたように、聖書のメッセージ、あるいは古典的なメッセージを讃美歌の歌詞として、人々の心に根付くように、健全な神学を生活化するようなものをやはりきちんと遺していなければならぬことを私も持ち続けてきましたので、皆さんも覚えていただきたいと思います。

司会(坂本):今日は関西学院の聖歌隊の皆様に英語で賛美していただいた時に、**18**世紀の英国にタイムスリップしたのではないかという感覚を感じたのですが、北村先生が礼拝との関係を述べていただいて、さらにその深い意味が私たちの心に入ってきたように思います。ありがとうございます。次に深町先生にチャールズとメソジストとの関係について語っていただきたいと思います。

深町氏:今お話がありました、今日の収穫は、さきほどの関西学院大学の聖歌隊の方々、水野先生に解説を伺わせていただいて、チャールズ・ウェスレーについて、大事な事を言葉の意味においても、メロディにおいても学ぶことができました。先生方や皆様とともに心豊かにされる一時となりました。私は今、讃美を聞いただけで帰られる学会だったらなあと思っているのですが、短い時間ですがお話をさせていただきたいと思います。私に与えられました課題は、メソジストにおけるチャールズの役割だと思います。それについて若干の事をお話させていただきたいと思います。

ウェスレー兄弟は英国教会内で立ち上がり、兄弟で力合わせてメソジスト仲間と信仰復興運動をはじめた結果、英国教会を内部から改革することになり、また社会に影響を与えることになったと思います。私は、メソジスト運動は教会とは無縁な捨てられた状態の労働者や貧しい人々、心に痛みを持つ人々に信仰の火を灯さんと、ジョンとチャールズが中心となって行った野外伝道(フィールドブリーチング)に発していると思います。ですからチャールズが作った讃美歌も聖歌隊の為に作った典礼音楽ではなく、むしろその集会に参加したものが、皆で讃美をする、そういうところに中心があったように思います。

ジョンの弟で、また、詩才に恵まれた、父のDNAをもらったチャールズ・ウェスレーが作詞した讃美歌は、大衆伝道の最大の武器であったと言っても言い過ぎではないと思います。事実、メソジストこそ、近代大衆讃美歌の産みの親、最も大きい影響を与えた教会であったと言っても決して過言ではないと思います。

チャールズの詩は、個人の感情に強く訴えるものであり、語呂がよかったと専門家は言っております。調子のよい、メロディにのりやすいものになっていました。それは何かというと、ジョンやチャールズが属していた当時の英国教会でうたわれていた会衆詩編歌の、荘重で、儀式的で、四角四面の旋律とは違っていたということであります。形式的な教会の音楽では、その当時の大衆の心はつかめませんでした。そういう時にチャールズの作った詩、讃美歌が人々の心を強く捉えていき、大きな影響を与えたのです。

ところで、チャールズと兄ジョンとの関係ですが、皆様もご存知のように、チャールズ・ウェスレーがオックスフォード大学の中にホーリー・クラブを作っていないければ、メソジストの信仰復興運動に発展したかどうか分かりません。兄弟が力を合わせて、メソジストの仲間と信仰復興運動を始めた結果、英国教会を内部から改革し、また、社会の迷える魂を救ったといえるでしょう。彼は兄ジョンを中心とするメソジスト信仰復興運動において、北村先生の話にありましたように英国教会の司祭として、またある時には別の言い方をすれば、野外説教家、エヴァンジェリストとして、特に讃美歌の創作に励み、キリストの真理を、わかりやすい言葉で、そして、英国教会のいかにも厳格な型にはまった旋律ではなくて、今でいえば演歌のような、当時の民衆が愛していたメロデ

イを使って、人々の心に深く響かせた、そして信仰を奮い起こしたのです。

兄のジョンは生涯において、約四万回の説教を行ったとされています。本当に四万回かどうかわかりませんが、そう言われています。他方、弟チャールズは、先ほどからの説明にありますように正確にはわかりませんが、**6,500** から **9,000** 讃美歌を創作しました。そして、産業革命の中で、多くの社会変動の中で迷える大衆の魂に訴えかけたのです。チャールズという人はとても愛情深かった。気の優しい、繊細な感受性の持ち主であったと記している人もあります。さきほど出ましたが、父親サミュエルゆずりの詩人としての資質にも恵まれていたようです。素晴らしい数々の讃美歌を出して今日に至るも、ここが大事なのですが、単にメソジストの人だけでなく、他教派の人たちも歌っているのです。英国教会の人々も讃美しているのです。さきほど出てきましたアイザック・ワッツが、チャールズの讃美歌一つだけでも自分が書いたすべての詩に価するという賞賛の言葉を語ったと記しています。

ところで、弟のチャールズについて、岩本先生がペンテコステの日と言われました回心ですが、兄の **1738** 年 **5** 月 **24** 日の体験よりも前の **5** 月 **21** 日の日曜日に体験しました。彼は、既に兄と同じように英国教会の教職について **12** 年間の経験をつんでいたのですが、自分の罪に悩み、苦しんでいました。彼の日記の一部によりますと、彼は肋膜炎を患って、重病の床についていたときに、チャールズが死んだという誤報が周囲に流れたことを聞かされます。彼の魂は、自分の罪の重荷に苦しみあえいでいたので、それが真実ならばどんなに自分は幸せだろうかかと述べています。ところが、ペンテコステの日、回心の日に、彼の病床を見舞いに訪れた貧しい女性の言葉と、親友のブレイが選んでくれた詩編 **32** 篇 **1** 節、「いかに幸いなことでしょう。そむきを赦され、罪を覆っていただいた者は」。そのお言葉を聞いたとき、そして、その言葉が心に入ってきた時、チャールズは心の中に救いの光を見ることができたのです。その一つの出来事は、キリストにあって魂の闇夜から昼に移される経験、と言っていいと思います。そのチャールズの罪と死から救われた喜びを讃美歌の詩に創作したのが、教団讃美歌 **62** 番の「主イエスのみいつとみ恵みとを」という讃美歌であります。

さて、メソジストの信仰復興運動を考えます時に、弟チャールズの信仰の歌

と兄ジョンの聖書に基づいた福音説教が、両方相まってメソジスト信仰運動となり、産業革命の時流に生き悩む魂を立ちあがらせていったのです。皆様もご存知だと思いますが、M・エドワードが書きました『ウェスレー兄弟 サミュエルの息子たち』という本があります。都田豊三郎先生がずっと前に翻訳されたものですが、私はあれを時々読むのですが、どちらの兄弟がいなくても、このメソジスト信仰運動と、讃美を通じての迷える魂（失われた魂）の救われることはなかったと思います。つまり、神さまは、兄ジョンと弟チャールズの働きを分離するのではなく、両者を同時に豊かにお用いになって、あの信仰運動を活かされたということができると思います。先ほどから度々ふれていますが、ウェスレー兄弟を中心とするメソジスト信仰復興運動が霊的なうねりとなって広がっていった姿は、**singing Methodist, singing church**,あるいは **folk church**（最近そういう言葉も使われているようであります）であったのです。

最後になりますが、皆さん、野外で、**2,000** 人とか **3,000** 人という民衆が讃美している光景を心に描いていただきたいと思いますが、そういう光景は、英国教会の、あの堂々とした立派な聖堂の中で、敬虔な、聖礼典のための歌をうたってきた保守派の人たちにとってショッキングだったと思います。彼らに対して英国教会の一部の人たちが、「わいせつ転じて聖歌になる」と言って揶揄したのです。しかし、そのハートフルなメソジストの讃美歌に惹かれる者たちが後を絶たなかった。どんどんそれが広がっていきました。**1787** 年にある英国教会の聖職者が、次のようにこぼしています。「一人が説教で・・・」。ちなみに、この説教とは野外説教のことです。一言追加しておきますと、当時英国教会は聖堂以外のところで神の言葉を説教することはなく、禁じられていたのです。しかし、ウェスレー兄弟、そしてメソジスト教会の人たちは、見失われていく魂を見過ごしにすることはできなかったのです。あえて、あれだけ英国教会を大切にしたい兄弟ですが、このことについては規律を破ってまでやったのです。その影響をみて司祭の一人はこう言っています。「一人が野外説教で国教会からひきぬかれる間に、10人が音楽で誘惑される」。つまり讃美歌はそれだけ大きな効果を持っていたのです。そしてついにはそれが、**Singing Methodist, Singing Church** になったのでした。

それからもう一言触れさせていただきますと、バーナード・ロード・マニン

グという人は、彼の書いた本の中で、チャールズの讃美歌は「クリスチャン文学の格付けとしては、詩編(Psalms)、祈祷書(Book of Common Prayer)、Common of Mass (ミサ曲)と同等なものだ」と述べ、非常に高く評価をしています。それから、さらに、ジェイ・ジュリアンという人は、古今東西、讃美歌作者の中で、重量と、内容も数も共に最大なのがチャールズ・ウェスレーだと言っていますが、その言葉は決して言い過ぎではないと思います。

最後に、問題として一つ指摘したいのは、アメリカにおけるメソジスト運動とイギリスにおけるメソジスト運動は深い関係にあります、違いのあることです。アメリカにおけるメソジスト伝道はホイットフィールド、後にフランシス・アズベリーが最初の責任者に選ばれていきましたが、アメリカのメソジストの運動は、いわゆる巡回説教者制度が中心になって、まさに、アメリカ中を伝道し、アメリカ文明を開発する為の大きな影響力となりました。それから、開拓者精神がミッション(伝道)と結びついたのがメソジスト教会であります。

今年、皆様もご存知のように戦前の日本メソジスト教会が成立して百年の記念の年です。カナダ・メソジスト教会とアメリカ監督メソジスト教会、南部メソジスト教会に属す人々(たとえば中国に派遣されたロバート・マクレーという青山学院の初代院長)は、日本伝道が大事だと言って日本に来ました。これら三派の人々は、日本では教派の違いを作ってはいけないという点で大いに理解を示して、後に、関西学院の吉岡美國先生、アメリカの監督教会を代表する本多庸一先生、平山先生と一緒に合同に協力しました。メソジスト教会は、他の長老主義とか、その他の教会と違って、本部がアメリカにあって、憲法があり、決めた規則に従って伝道していくのでなかなか思うようにならず、三派合同を説得するのに25年かかったのです。しかしその後、大きく教勢が伸び、特に学校や福祉事業を通して日本社会に切り込みました。その時にも、讃美歌が大きな役割を果たしました。

大変粗雑な話しではありますが、終わらせていただきたいと思います。

司会(坂本):ありがとうございます。チャールズの讃美歌がメソジストの実践性と深くかかわっているということを改めて教えられたご講演であったと思います。それと共に、チャールズは実践を持っていましたが、讃美歌の深い内容

や教理、神学も持っていたと思いますので、山内先生にチャールズの讃美歌と神学というテーマでご講演いただきたいと思います。

山内氏:本日のシンポジウム、アイウエオ順とは言え、四番バッターというのは聞こえがいいのですが、実はパネリストのお名前を見た時に、ウェスレー兄弟のスペシャリストが並んでおられて、私は何とか落ち穂拾いの役がつとまればと思いました。

しばしば「兄は説教し、弟は歌った」と言われますが、実は兄ジョンも **sacred singing** については並々ならぬ関心を抱き、すでに3人の先生方が語られた通り、相前後して経験した二人の「福音的回心」(1738年5月)以後、兄弟の共編になる **Hymn Book** が50冊以上も出版され、**Select Hymns(1761)**にジョンが寄せた有名な **Directions for singing** の7項目は今日も生きています。メソジストの礼拝改革は、当時のひからびたリタージュに自由祈祷と讃美による活力を与えることを眼目とし、ことに教会と区別される **society meeting** での讃美の共同(唱和と朗誦)が **Christian piety** の体現方法として積極的に用いられ、深町先生が強調されたように、霊的戦いと伝道の強力な武器となった事実は、メソジスト固有のミッションが単なる神学運動を超えて、むしろみんなの「歌ごえ運動」と言ってもよい生命と力を秘めていた証左であります。岩本助成先生はエプワース牧師館のファミリー・マターについて触れられましたが、ジョンとチャールズのパーソナリティーの違いや1750年代頃からの教会観や按手の問題を巡る理解の対立など、多少とも兄弟間の確執があったことは否めないにせよ、やはりこの兄と弟は他に類をみない"more than equal partner" (G.M.Best)として文字通り「共働」したと言い得ましょう。

ウェスレー兄弟とその群れが「歌うメソジスト」と呼ばれたことは理由のあることですが、抑もキリスト教会がその成立の当初から賛美を歌う信仰共同体であったことを新約聖書が随所で証言しています(使16:25, Iコリ14:15, エフェ5:19他参照)。ここでは特に以下二箇所を挙げます。

(1) Iコリント14:15からは「異言」と「預言」の問題を介して、信仰告白としての賛美の積極的意味を正しく読み取らねばなりません、(2)コロサイ3:16bは「知恵を尽くして互いに教え」を「詩編と賛歌と霊的な歌により」以

下にかけて訳すこともでき、豊かな信仰を培い養う教育的手段としての賛美が奨励されています。今立ち入った考察はなし得ませんが（拙論「礼拝に於ける賛美の意味」『礼拝と音楽』No.37、教団出版局、1983、pp.24-29参照）、ここではお手元のメモにある **Kingswood School** について短く紹介いたします。この学校はやはりウエスレー兄弟の共働による結実の一つで、1748年に創立された **Boarding school**、現在も英国有数のパブリックスクールの一つに数えられる名門校です。私は1998年、深町正信先生や広島女学院の西垣二一院長らと一緒にこの **Kingswood School** 創立250周年の祝賀に合わせて開催された **IAMSCU**（国際メソジスト関係学校・大学連盟）の総会に参加し、バース郊外丘陵地の美しいキャンパスで二日間を過ごしました。ベスト校長の重厚な記念講演がハイライトでしたが、その折に贈られた案内冊子の大きな見出し **"Born in song"** という一句が目にとまりました。先程、北村宗次先生が1933年版の英国メソジスト讃美歌集の序文にやはりメソジストは「歌の中で誕生した」と記されていると話されましたが、**Kingswood**の学校案内からその一部を敷衍訳します。

「本校の創立者であるウエスレー兄弟によれば、**Hymn** は神の愛に応える人間の生き方の中で、知性 (**intellect**)、感情 (**emotion**)、意志 (**will**)、そして肉声 (**voice**) を一つに統合 (**unite**) する。信仰の証しとしての歌詞 (**words**) が旋律 (**tunes**) にのると、それが人間の心と頭脳、霊性と知性を調和的に発動させる有効な媒体 (**powerful medium**) となる、ジョンは讃美歌が人間にとって愛の炎を燃やし、揺るがぬ希望を抱かせ、確かな信仰を育む神の「恵みの手段」であると説き、チャールズは登校日には必ず讃美歌指導に当たり、チャペルだけでなく、教室でも（讃美歌 21）#4、#262、#431、#475 などが盛んに歌われた、ウエスレー兄弟の豊かな音楽的遺産 (**musical heritage**) のゆえに、**Kingswood School** は讃美の共同から生まれ (**born in song**)、その教育プログラムは **hymn singing** と分かち難く結びついていた」。

今回の学会では開会礼拝で関西学院の **Choir** がチャールズの讃美歌を数曲英語の原詞で奉唱いたしました。キリスト教主義学校における讃美歌唱の教育的意味については改めて考え、メソジストの教育的ミッションの新しい可能性を拓くことが、今深いところから求められていると思います。

ここで、私に課せられた「チャールズの賛美と神学」というテーマに関して

差しあたり以下の三項目を取り上げます。

先ずチャールズによる三一神の讃歌原詞を引用します。この讃美歌は、ヨハネによる福音書一四章二〇節のテキストに基づいて作られ、兄ジョンも共鳴して全面的に受けいれていますから、ウエスレー兄弟が共有する聖霊理解を十分に表白しているものと考えられます。

Whene'er our day of Pentecost	我らのペンテコステの日来るとき、
Is fully come, we surely know	父、み子、み霊なる我らの神、我らにくだりぬ。
The Father, Son, and Holy Ghost	み子は父のうちに住み、
Our God, is manifest below:	父はみ子のうちに、
The Son doth in the Father dwell,	たえなる歡喜のみ霊を与え、
The Father in His Son imparts	貧しき我らの心のなかに、
His Spirit of joy unspeakable,	永遠に生き給う。
And lives for ever in our hearts.	

Our hearts are then convinced indeed	かくて我らは確信する、
That Christ is with the Father One;	キリストと父は一つなる、と。
The Spirit that doth from Both proceed,	み子と父より出ずるみ霊により、
Attests the co-eternal Son;	永遠に共存するみ子が証しされ、
The Spirit of truth and holiness	真理と聖の源なるみ霊により、
Asserts His own Divinity:	神性のすべてが確証される。
And then the orthodox confess	かくて我らは告白する、
One generous God in persons three.	我らの神は、
	三つにいまして一つなる、と。

(Cf. G. Osborn, ed., *The Poetical Works of John and Charles Wesley, 1868-72*, VII, 248-249.)

ここには三一の神観における聖霊の位置、あるいは父とみ子の二者からの聖霊の発出について、さらに加えて、聖霊はドグマや概念として神学的に説明され、思考の対象となることを超えて、結局その内的働きが生活の中で体験され、リアルに掴まれた事実が証言される他はないゆえに、これらのことはすべて、キリスト者の体験という脈絡の中に見出されるべきものであることが確証され

ています。この讃美歌もキリスト者の礼拝において、実際に唱和されることを前提としていると思われますが、これらの **Hymns** が時としてメソジストの **society meeting** で黙想（メディテーション）のために朗読されたことも知られています。

ウエスレーの三位一体論における主要な貢献は、彼がユニテリアン的な主張に対し、一貫して聖霊の神性に関する教えを強調した点に認められますが、さらに加えて、われらの内に生きて働く聖霊の人格的性格の強調もまたウエスレーの神学を貫流する特色で、この点もチャールズの讃美歌と深く響き合っています。

次にウエスレーが提唱した「キリスト者の完全」が、全き謙遜における「愛の完全」であるという点はよく知られていますが、このキリスト者の生活に固有の目標について、やはりチャールズの讃美歌が余すところなく表現し、今日もなお世界中のメソジスト教徒の間で愛唱されているポピュラー・ヒムの一つであることはご存知の通りです。第一部の礼拝では、賛美歌(21)四七六番（54年版三五二番）の歌詞と曲で唱和しましたが、ここにはアズボーン編の **Poetical Works** 所収の原テキストを掲げます。

Love Divine, all loves excelling,	こよなき神の愛、
Joy of heaven, to earth come down,	あめなるよるこび、地にくだりて、
Fix in us Thy humble dwelling,	汝のつましき住家にとどまり、
All Thy faithful mercies crown:	変わらぬ汝の憐れみを冠となしたまえ。
Jesus, Thou art all compassion,	イエスよ、汝はあわれみのすべてであり、
Pure, unbounded love Thou art,	清き、かぎりなき愛の源なり。
Visit us with Thy salvation,	汝のみ救いをたずさえくんだり、
Enter every trembling heart.	おののく心にやどりたまえ。
Breathe, O breathe Thy loving Spirit,	汝、愛のみ霊よ、
Into every troubled breast,	うれしいの心に吹き来りませ。
Let us all in Thee inherit	いざ我ら汝のうちに住み、
Let us find that second rest:	第二の安息を見出さん。
Take away our Power of sinning,	アルファであり、オメガであり、

Alpha and Omega be,	信仰の初めであり、終りであるお方よ、
End of faith as its Beginning,	我らのうちに働く罪の力を取り除き
Set our hearts at liberty.	我らの心を解き放ちたまえ。
Come, almighty to deliver,	全能者よ、救いのために来れ、
Let us all Thy life receive;	いざ我ら、汝の生命を受けん。
Suddenly return, and never,	忽然とかえり来て、
Never more Thy temples leave.	汝の宮にとどまりたまえ。
Thee we would be always blessing,	我らつねに汝を賛美し、
Serve Thee as Thy hosts above,	天の軍勢のごとく汝に仕え、
Pray, and praise Thee without ceasing,	たえず祈り、汝をほめたたえん、
Glory in Thy perfect love.	汝の全き御愛にみ栄あれ。
(Osborn, Poetical Works, IV, 219.)	

ここには、「全き愛」という奇跡が、ただ恵みの愛のみ霊の働きによってのみ生じることが証しされています（特に第二節はじめの四行、讃（21）四七五番二節参照）。そしてこのようなキリスト者の愛の完全が、「聖化にいたらせるみ霊(sanctifying Spirit)」の力によってのみ成就される神の賜物であることについては、チャールズのまた別の讃美歌が、端的に表白しています。

Come then, and dwell in me,	力の源なるみ霊よ、
Spirit of power within,	来りて、わがうちに住み、
And bring the glorious liberty	悲しみと怖れと罪の淵より、
From sorrow, fear, and sin:	我を解き放つ輝く自由を与えたまえ。
The seed of sin's disease,	健康の源なるみ霊よ、
Spirit of health, remove,	完全な聖潔のみ霊よ、
Spirit of finish'd holiness,	完全な愛のみ霊よ、
Spirit of perfect love.	とく来りて、罪の病いを取り去りたまえ。
(Osborn, Poetical Works, XIII, 45.)	

ウエスレーによれば、聖餐の礼典は、恵みの主要手段であり、それによって聖霊の恵みがすべての神の子らの魂に注がれる最大の通路であると言われます。すなわち、人間が用いるべく神によって祝福されているすべての定めのみならず、

主の晩餐こそわれわれに授けられたもっとも貴重な遺産なのです。

The prayer, the fast, the word conveys, 祈りと断食とみことばが、
When mixed with faith, Thy life to me; かたく信仰と結び合わされるとき、
In all the channels of Thy grace 汝の生命わがうちに伝えられる。
I still have fellowship with Thee: 汝のみ恵みのあらゆる通路によって、
But chiefly here my soul is fed われは汝との交わりをもつ。
With fullness of immortal bread. されど我が内奥の魂が養われるのは、
ただこの永遠のパンによって
満たされることによる。

(Osborn, Poetical Works, III, 254.)

しかも、主の晩餐において受けるパンとぶどう酒を含むこれらの外的手段を通して、もし神の霊が生きて働かないならば、いっさいは無力であり無益である故に、ウエスレー兄弟はこの内的証示を可能にする聖霊を求める祈りとしての讚美歌を重んじたのです。

Come, Holy Ghost, set to Thy seal, み霊よ来りて、汝の刻印を押し
Thine inward witness give, 汝の内なる証しを与えたまえ。
To all our waiting souls reveal 汝を待ち望む我らすべての魂に
The death by which we live. 我らの生命の源なるキリストの死を
告げ知らせたまえ。

Spectators of the pangs Divine 我らいま
O that we now may be, 神の悲しみの目撃者とならん。
Discerning in the sacred sign のろいの木にかけられし主のみ苦しみこそ、
His passion on the tree! 我らの思いみるべき聖なるしるしなり。

(Osborn, Poetical Works, III, 220.)

聖霊は、パンとぶどう酒という外的要素を通して、われらのうちにキリストの苦しみの再現を見てとることのできる信仰を呼び覚められる故に、われらをして全身的に信ずることを可能ならしめるのは、迫り来るみ霊の働きによるほかはないという真摯な告白です。

先にあげた□コリント 14:15 「霊で讚美し、理性でも讚美することにしましよ

う」は、その文脈から「異言」批判のテキストと目されます。コリントの教会は、礼拝が「異言」を得意とする一部の人々の反理性的で、他への愛を欠いた無秩序に陥る深刻な危機に遭遇していました。ひるがえって、日本の教会、私たちの礼拝には、問題がコリントの教会とは逆になっているような事情があります。有限な人間の霊 (spirit) が神の霊(The Spirit)に捉えられると、殆んど脱自的な仕方です。「アーメン」という叫び声を上げる。それがそのまま神に向けられた霊のほめ歌になる。ウエスレーが提唱した「とりわけ霊的にうたいなさい」(Above all, sing spiritually)の一句が互いの心に新しく響いてきます。もしパウロやウエスレー兄弟が霊的沈滞をつづけている日本の教会に身をおけば、「では、どうしたらよいのでしょうか。私は理性で賛美するとともに、むしろ霊でも賛美しよう」と呼びかけたに違いありません。持ち時間となりましたので、ひとまずここで区切らせて頂きます。

司会 (坂本) : 大変幸いな御講演をありがとうございます。先生の非常に素晴らしい名訳を聞いただけでも、今日来たかいたがよかったなと思いました。私も海外に留学した経験があるのですが、なかなか英語の詩というのが身につけておらず表面だけ歌っていたように思いますが、チャールズの勉強をして、原語の歌詞が心に響くものがあります。そういう意味で山内先生が、素晴らしい訳を通して、メソジストが持つ讚美歌の役割を示してくださって感謝します。

後半部分

司会 (坂本) : まず、順番に五分ずつパネリストの先生方にそれぞれ語っていただきたいと思います。他の先生方の講演を聞いた上での感想や反論、またご自分の講演に対する追加等がございましたらお願いします。まず岩本先生にお願いしたいと思いますが、先生は、ご存知のようにウエスレー・メソジスト学会の会長として私たちの会にとって、先生がいて下さったから育ってきた部分があります。また講演題でもおわかりのように「ウエスリ」という言葉にこだわりがあります。今回の講演では、特に家族について、もし時間があれば学びた

いと思います。また結婚についてもお聞かせ願えればと思います。よろしくお願いたします。

岩本氏：ジョンという人物、チャールズという人物の結婚というのは、こちらが正しくてこちらは間違っているとか、こちらはラッキーだけこちらはアンラッキーというように判断してほしくないと思います。あなたも、私も一刀両断式断定はしてほしくないと思います。彼らもして欲しくないと思います。

私の今考えていることは、ジョンの場合は、彼が独身で生きるということをごどれくらい思っていたかというので、その点はかなり調べなければならぬと思います。半年間くらいかかって、ジョンとモリー(奥様のメアリー)さんとのやりとりの手紙を読みました。

一番おもしろかったのは、ブラックウェルという信徒(ロンドンの銀行家)であるかなり見識をもった人物が、夫婦の問題に巻き込まれ、頼まれて夫婦の調停役となり、また、ジョンからも奥様からも訴えられて、嫌々ながらも夫婦の問題に介入したことが明らかになっています。

不幸な出会いと言いますが、その前にグレース・メアリ、その前もあるでしょうが……。独身というものを非常に尊重し、しかも、イエスさまと結婚したのではないかと周囲が思うほど、野外に出たり、街角に立って伝道したりする人物でありましたから、奥様もたまったものではない。こういう旦那さんについて、最初はメアリーも一生懸命に旅行するのです。石を投げられたり、暴漢に襲われたり、いろんな問題の中に一生懸命に奥様はついていったのです。私は「けなげだな」と思います。その中でヒステリックな状況が起こってくる。またジョンにもいろいろな問題点が起こってくる。まあそういうことをできるだけ、正邪という考えではなく、より正しく理解して、最後はキリエ・エレイソン、「主よ、憐れみ給え。主よ、彼らの魂に祝福を、私の魂にも祝福を」と祈らなければならないと思います。

ブラックウェルは、「ジョン先生、あなたにも非常に問題点があります」と単刀直入に言うのです。「あなたは奥さんのことを少し勘ぐりすぎる」。奥さんが、知られたくない書類を論敵に送って、あばきたてる。ジョンさんのもので知られたくないようなこともあると思うけれど、そういうことに対して、少し過敏

すぎるということもありました。

チャールズとの関係もそうなのです。二人は結婚する際には、お互いに相談し合って互いに相手を見ようとします。チャールズの場合に、三人の名前を挙げたこともあります。チャールズとサリーの結婚後、ジョンはチャールズに黙ってモリーと結婚してしまうのです。チャールズに言わない。けしからんと思われるでしょうが、彼らも人であって、いろんな弱点を持っています。

私の言いたいことはただ一つ。正確に第一次資料を読むべきであるということです。

司会(坂本)：続いて北村先生お願いいたします。

北村氏：最初の時に言いましたように、私たちの讃美歌21にも15編のチャールズ・ウェスレー原作による讃美歌が載っておりますが、その半分の7編が最初の礼拝で歌われました。もう一つは、これは今の讃美歌にない(実は30年前に出されました讃美歌第2編の中に入っています)。それらが歌われて、今回の集会で現在我々の讃美歌の中にある半分が紹介されております。ところが、もつともつとたくさんあるのだということを皆様実感されていることかと思えます。ただ、讃美歌を、実際、私たちが日本語に訳して歌うようにする時、そこにジョン・ウェスレーやチャールズ・ウェスレーの神学が受肉するのは大変だということを思わされております。

聖餐の讃美歌もたくさんあるのに、日本の讃美歌の中に入れられなかったというのは、日本の教会が伝道ということは一生懸命に言ってきましたが、礼拝ということの本気で考えてこなかったということではないかと思えます。私は、ずっと牧師として大半を過ごしてきました。私の関心は礼拝学です。礼拝が本当に礼拝である為にどうしたらいいのか。そして礼拝が宣教に結びついていく為に何が一番大事なのか、そのヒントを与えてくれたのがチャールズ・ウェスレーの讃美歌でした。それを正確な日本語の歌詞にすることが必要です。

先ほど山内先生が私訳をされまして、「汝」と訳されましたが、それではこれからの時代の人々には難しい。判る言葉かもしれませんが、やはり、今の一般の人たちの日常生活の中で使われている言葉で賛美されてこそ、神の恵みに生

きることはこういうことなんだと実感できるようになる。大変な課題なのです。

課題というのは、恵みがあってそれを受け止めてどう表示するかということですね。アウフガーベ（課題）ですから、それを皆さんも一緒に担っていただいていただければいいと思います。ほんの付け足しですが・・・。

深町氏：今流行の「千の風になって」という歌がありますが、よく歌うんですね。このごろ、教会関係で何件か亡くなった方の埋没式に行ったのですが、式の牧師さんのうち三人も使いました。来ている人たちは、何か感ずるものがあるんですね。それを見ていて、いろいろな感想を持ちました。

大学などでキャンパスでの伝道ということを考えています。一部ではゴスペルフォークのような形で一生懸命メッセージを伝えようとして、中高の礼拝になるとそちらの方が、評判がいいと言われます。この点は、北村先生がおっしゃったことはとても大事なことです。メソジストの信仰復興運動は礼典運動と言われることで、あの当時聖餐式を守らない、礼拝をしないということに対して正していくことが大前提としてあったと思うのです。そういう意味では、そのことは、現代の教会においても大事にしなければいけないと思います。

しかし、そこから、メソジストの場合、ホーリー・クラブの場合もそうですが、英国教会の式文から、だんだん、早朝礼拝、そこでメッセージを語る、それに対する応答として讃美歌を歌うように変わっていったということもあります。ですから一面だけとらえて言えない面もあります。

チャールズ・ウェスレーの讃美歌は、救われた喜び、爆発的な歓喜、天国の喜びです（喜びというのは当時の産業革命によって取り残された人々の心に非常に訴えたのではないのでしょうか）。現在、全国の教会の礼拝出席平均は、38名です。東京・大阪も含めて、それくらいに減ってきています。そこで重要なのは喜びです。説教に対して喜びがもっと強調されなければなりません。

また、今まで、メソジスト、あるいはウェスレーは偉いんだという本は出ています。しかし基礎的な今日のようなお話も大事です。今日はチャールズの讃美歌に絞って学んでいます、専門的な話も必要なのです。日本でのウェスレー研究、メソジスト研究がもっともっと盛んになっていくことを、また他の学会との交流がなされていくことを願っております。

山内氏：岩本先生がウェスレーのファミリー・マターについてお話ししてくださいました。兄ジョンは、チャールズを熱狂的だと批評しますが、チャールズは兄ジョンを、自分と違うところがあるけれども、最終的にはホーリー・クラブの指導者もジョンに譲り、お兄さんの権威を重んじました。ジョンは英国人としては体が小さかったが、チャールズの方が、体は弱かった。そしてあるポートレートを見ますと、チャールズには躁鬱の傾向があり、それが讃美歌にも現れているというのです。

今日も聖餐の讃美歌についてずいぶん語られましたが、再臨や終末については少ない。逆に多いのは、パーソナルコンバージョン。それはパウロのローマ書7章の苦しみ、そして8章の喜びという信仰の確証についてのテーマでありました。人間の弱さではなく、弱いものが強くされるという証しでした。多分、チャールズの作品がすべて讃美歌として礼拝で歌われたのではなく、英国教会はリタージカルですから、大部分はメソジストのソサエティで歌われた。

チャールズ・ウェスレーの何節もつづく長い作品は、歌われるのではなく、朗読されることもありました。その一部が讃美歌となったのです。言葉が旋律にのせられるとアピール性が高まることを兄弟とも認めていました。

司会（坂本）：これまで講演して下さった4名の先生方に盛大な拍手をお願いします。**20分**休憩して、次の**40分**はフロアーからとらせていただきます。配りました質問用紙に質問をお書きいただき、司会の馬淵さんに読み上げていただきます。

フロアーの質問に回答する

司会（馬淵）：二部の司会をさせていただきます日本大学の馬淵と申します。私は、数年前、ある先生から頼まれてチャールズ・ウェスレーについての論文を書いたのですが、その一本書いただけでチャールズの専門家と言われることもあります。日本においては専門家が存在しない領域ではないかと実感しています。このフロアーには、研究を始められたばかりの方もいらっしゃるように思

います。是非、チャールズ研究に関心を持っていただければと思います。

休憩中に、フロアーの四名の方から報告者に対して質問が出されました。他にもご質問をお持ちでしたら、是非、お出しになってください。

まず、今回、岩本先生が発表をご準備されてお分かりになったことは、ご自分がいかにチャールズ・ウェスレーについて知らないかということが分かったとおっしゃっておられました。日本ではチャールズ・ウェスレーのことを知ろうとした場合、彼についての和書ない、英文の論文・書籍しかないというのが現状です。私自身、今日先生方のお話を聞いて幾つかの疑問を改め持ちました。たとえば、チャールズの讃美歌は本当にすごいのか、チャールズはメソジストなのか、また、兄と仲がよいのかとか……。従来、チャールズに対して我々が心に抱いているであろうイメージと正反対な問いかけなのですが、先生方に実際のところを教えていただければと思います。しかし、その前に、フロアーから出されましたご質問を読ませていただき、報告者の先生方にお答えいただきたいと思います。

最初のご質問は、救世軍の方からのご質問です。「チャールズ・ウェスレーの讃美が伝道にも影響を与えたということが印象に残りました。少々細かい質問になりますが、野外説教でも讃美はなされたのでしょうか。その際どういう伴奏があったのでしょうか。礼拝ではリコーダーや金管楽器への言及がありましたが、それともう一つの質問です。メロディにも派によって違いがありますが、当時の大衆的な音楽要素が取り入れられたことがありますか。私の教派である救世軍は、19世紀後半に英国で生まれですが、社会への伝道の取り組みから金管楽器を使っていますので興味を持ちました。」

次に、日本基督教団の方からのご質問です。「チャールズが当時の流行歌を讃美歌に変えることによってリヴァイヴアルを起こしたということですが、何故日本ではそれが出来ないのでしょうか。衰退しつつある日本の教会を再生させる為にこのような視点が必要だと思うのですが、先生のご意見をお聞かせ下さい。」

インマヌエル伝道団の方からの質問は、「信徒伝道者の成果について考えを改めたとありますが、ジョンとチャールズには考え方の違いはなかったのでしょうか」です。

それかナザレン教団の方からですが、「1738年5月24日、ジョン・ウェスレーがルターの序文で回心し、1738年5月21日、チャールズ・ウェスレーのペンテコステの日、ルターのガラテヤ書注解で回心したと聞いたことがあります。それが事実であるならば、チャールズに対してのルターの影響はどのような影響があるのでしょうか。教えていただければと思います。深町先生、岩本先生にもお答えいただければと思います。」

深町氏：私も先生方にお答えいただければと思いますが、まずチャールズ・ウェスレーが野外伝道をした時に、楽器を使ったのかどうかということですが、私はよく知らないで、北村先生に伺いました。

当時もそうでしたが、今もソングリーダーがいて、礼拝の讃美を盛り上げていくのであります。今の時代はマイクがありますが、私はよく思うのですが、当時、2,500人集まったとか、3,000人集まったとか。どのように群集をまとめたのかと不思議に思います。先生方も経験されていると思いますが、一回説教すると相当疲れますよね、正直言って。それだけ皆全力投球しているのです。音楽については、今日は関西学院の聖歌隊が讃美歌演奏をしてくださいましたが、当時は、楽器は野外では使わなかったのではないかと思います。ソングリーダーが会衆の讃美を導いたのではないのでしょうか。

大衆的な流行歌という表現が、きつく響いたようです。それぞれ讃美歌の譜面上のところに、誰が作った曲とか、どういうメロディかというのが書いてありますよね。日本でいう演歌とか、そういうものとは違う（演歌が悪いと言っているのではないですよ）。もう少し、ヘンデル作とか、ワッツ作とかになっています。他方、英国教会の中でささげられていた讃美歌は、もう少し違った意味で喜びがささげられていたのだと思います。

それから、救世軍では、クリスマスが近づくと街頭や路上で募金活動を社会鍋で行い、又金管楽器を使って歌っておられます。皆様ご存知のことだと思いますが、救世軍の代表が日本に来ると、日本を代表して天皇・皇后が無条件で会うことが約束事になっているそうです。アメリカで起こった9.11のテロの後、救世軍の方々が一日二万食の食事を奉仕されました。その帰りに大將の方が来られて、英国大使館で歓迎会が開かれました。その時に、それはなぜかと

聞いたら、関東大震災の時に、特に英国の救世軍の方々がたくさんの援助をしてくださり、それに対する感謝をいつまでも忘れないためということでした。これは良いことだと思います。

いずれにしても、賛美の中心は、メロディと言葉ですが、無論品の悪い流行歌とは違います。ただ、もっと若い人にアピールする為に、若い人の心にとどく讃美の言葉を考えたかどうかという意見もあろうかと思えます。もう少しご質問の意図をお聞かせ願えませんでしょうか。

質問者（フロアー）：私が質問させていただきしたのは、さきほど先生がチャールズは当時の流行歌を讃美歌に変えたという話がありました。私は台湾に行くのですが、台湾の長老教会では、日本の昔の流行歌を讃美歌にして歌っているのです。子どもの頃の演歌、三橋美智也という方の「呼んでいる。呼んでいる。赤い夕日の故郷が」を、長老教会が讃美歌として歌っています。また原住民の教会に行きますと、部族の歌として讃美歌を歌っています。ずいぶん大衆化しているのです。

ところが日本の場合にはちょっと聞かない。聖歌なんか「ま白き富士」という歌が入っていますが、あれくらいで、日本で歌っている流行歌を讃美歌の中に取り入れたということは聞かないのです。それができたなら、日本人の心にもっと福音が入っていったと思うのです。なぜそのようなことを工夫しないかなと思います。讃美歌は西洋の歌と決めてしまっているところがありますので、日本の教会の復興の為に、そのようなものを取り入れていったらいいのではないかと思います。

深町氏：それについて、私は、やはり日本の教会、日本のキリスト者の中からもっと讃美の言葉が生まれなければいけないし、また、その言葉が日本に土着化して日本人の心の機敏に触れる讃美歌が生まれたら良いのではないかと考えます。そのことを北村先生が今、讃美歌委員会でご苦労下さっているのではないかと思います。今私たちが礼拝で使用している讃美歌では、おそらく松本卓夫先生のお父様がおつくりになった歌が一曲入っていると思います。それなどは、大変日本的なメロディです。そういうものがもっともっと普及して、特に

若い人にも、信仰を持ってきちんと教会生活をしている人の信仰告白の言葉として福音的讃美歌が歌われるようになったら良いと思います。キリスト教信仰が日本に土着化するためには、もっと時間がかかるとは思いますが、それが感想です。

岩本氏：信徒伝道者の問題、レイ・プリーチャー、アシスタント、ヘルパーと色々な呼び名をしました。チャペルをどんどんつくと、財産管理人が必要になります。チャペルが多くなればなるほど、それをどう管理するかが問題になってきます。財産上のトラブルも横領も起こります。それから、会吏スチュワートや、勸士という職務もあります。未だにメソジストに名前が残っています。四期会、年会もそうです。

信徒伝道者全般に対して言うならば、ジョンの立場とチャールズの立場は違ったと私は思います。ジョンは統率者として全員を活かしていかなければいけないが、教職不足です。礼拝や聖餐を強調すると、国教会もジョンを受け入れるようになります。本当かなと思って、私は、彼の日記を逆から読み出してみました。本当に彼を英国教会が受け入れたのかどうかは、たとえ学者がいろいろと言っていたとしても、この日曜日はどこの教会に行ったのかといったリストアップをしていかないと、ウェスレーが排除されたのか、そうではなかったのかは分からないと思います。

全体としては、ジョンは信徒伝道者を受け入れる。賜物の方ではなく恵み、グレースの方で受け入れる。ところがチャールズは、それをやっている国教会からの分離の問題が起こってくると考えました。彼はアングリカンだったのか。メソジストだったのか。そういう問題を思ったこともあります。まあどちらでもいいじゃないか。「キリスト者であるという考えもある」と答えると思います。(笑)

いずれにせよ、総括リーダーとしてのジョンの役割と、陰となり日向となり兄を支えていく立場としてのチャールズの立場。メソジストの不平分子は、全部チャールズの所に訴えて行くんですよ。ジョンのところには行かない。だからチャールズは危機感を覚えます。信徒伝道者をこのままにしておくことはできない。そしてチャールズは基準を作って、賜物によって「あなたはもう一度

洋服屋さんに戻りなさい。メソジストの信徒伝道者として給料を払うわけにいきません」と言ったのです。ジョンは「いけない。彼を受け入れよ」というのです。マックスフィールド・ベル事件というのが起こります。マックスフィールドはメソジスト協会から出て行きます。自分から離れて行った人ですが、後年、彼をジョンは訪ねています。

ルターの影響がウェスレーにあったのは当然だったのです。ルターはカルヴァン同様、私たちの共通財産です。ウェスリもそうですが、キリスト教界の共通財産です。私の不満はルターOK、カルヴァンOK、バルトOK、アウグスティヌスOK、ウェスリは？という姿勢です。ウェスリを読んでから言うならば納得するのですが、ほとんど読んでなくて言っています。

モラヴィア派との関わりでは、論文にも書きましたように懐疑的です。オルダスゲートについても書きました。今度出ました『メソジスト・ヒストリー』という雑誌におもしろい記述があります。「ペーター・ベラーはウェスレーから何を学んだか」という論文です。ウェスリがベラーから様々なことを教えられたことは有名ですが、ベラーがウェスリから何を学んだかということでは。ウェスリというイギリス人に会って、どのように福音が解明されたか。ウェスリが死ぬ頃は、メソジスト派は5万か6万です。ところがモラヴィア派は3千人でした。(人数で言ったらいけません)なぜ伸びなかったのか？何故ウェスリの伝道は伸びたのか。それはモラヴィア派もメソジストもお互いに問わなければならないと思います。モラヴィア派はイギリスでの伝道に本腰を入れなかった。アメリカへの中継地点という船待ちの時間を用いての伝道に過ぎず、ツィンツェンドルフの目はイギリスではなく新大陸に向けられていたのではないかと思います。新大陸を眺めながら、イングランド、スコットランド、ウェールズをくまなく歩いたウェスリの伝道とは大いに違います。

ルターに学びながら、ウェスリは伝道を通して神学的に展開したのです。見ようによっては、ウェスリはガラテヤ書に関するルターの記述についてぼろくそに書いています。あれほど、書いてもいいのだからかと思えます。以上です。

司会(馬淵)：以上で質問用紙を提出された質疑は終わります。フロアから質問を受けたいと思います。岩本先生もおっしゃったように、岩本先生でさえ、

チャールズを知らないということが分かったとおっしゃっておられました。皆さんも分からないことがたくさんあるかと思えます。私たちはそれぞれ、少しずつチャールズについて知っているかもしれませんが。そのような少しずつの知識を出し合いながら、ここにお集まりになった方々の知識を高めていきたいと願っております。

岩本氏：さきほどの流行歌についてですが、「バーフォーム」という音楽用語がありました。それはスタンザというか、水野先生がおっしゃったように、15節ぐらいつつと長い一区切りです。私たちは、一節、二節、三節というようにして歌うのですが、それを「バーフォーム」というのです。その「バー」を「酒を飲むバー」と間違った学者があり、それを酒場で歌ったというように解釈したという説もあります。

司会(馬淵)：それでは私の方から、北村先生に対して質問します。演歌という表現が出されましたが、演歌なのかという点を再度考えてみたいと思います。演歌というのはもともと、政治運動で演説が禁じられた時に演説を歌にしたとの経緯があります。そう考えれば、メソジスト派の讃美歌に対して「演歌」との表現もなるほど感じるのですが……。また、メソジスト派を近代大衆賛美の生みの親と位置づけて、本当によろしいのでしょうか。

北村氏：さきほどから質問にでていきますように、ルターは自分で、コラール、会衆歌を生み出しました。コラールの訳語として「衆讃歌」という表現がありました。一番有名なのは、詩編46編の「神はわがやぐら」、今は「神はわが砦」に替えられています。ドイツ語の原歌詞では、“**Ein feste Burg ist**”と始まります。ここで「**Ein**」は不定冠詞、「**ist**」は**be**動詞です。そういう言葉は短い。言葉に忠実にルター自身、農民にも歌いやすい曲を作ったのです。16世紀に作られたのが歌いつがれ、それが日本にも入ってきました。音のことを考えると、わかりやすい、本当は長調のドレミファソラシドは、教會的でないと言われていた時代であったのに、それをあえてルターは使いました。

その影響が18世紀のチャールズ・ウェスレーの歌詞に、作曲する人達が影

響を受けます。チャールズ・ウェスレー・ザ・ヤングという人がいるのですが、チャールズのひ孫くらいの人のことでしょう。そういう人たちが、わかりやすい旋律を生み出しました。それが演歌とどう関係するのか、まだ解決できていません。

演歌の感触がイングランドでどうなのか。日本の教会が演歌の旋律を受け入れられるのか。讃美歌委員会などでそのような話がでも絶対には具体化しません。讃美歌委員会は専門家であり、演歌を現実に歌って楽しんでいる人はいないのですから。讃美歌委員会で讃美歌を募集する時に演歌も募集するというように、台湾の話もさきほどでました、そういうふうになっていかないとなかなか解決しないだろうなと思っています。ルターの影響なども具体的にみると、以前の讃美歌集に、「神のお子のイエスさまは」という歌がありましたが、ルターは作詞もし、作曲もしました。チャールズは作詞だけをしたのです。子どもたちが作曲しました。ジョン・ウェスレーはボヘミア兄弟団の影響を強く受けました。ボヘミア兄弟団の良い讃美歌を英訳したものを第2編の時には二つ入れたのですが、讃美歌21には入れられていません。日本で大衆的な讃美歌がどうしたら定着できるようになるかは私も頭を抱えています。

司会（馬淵氏）：チャールズの讃美歌を歌う際、巷（ちまた）の人々がよく口ずさんでいたバラッド（バラード）形式が取り入れられたとあります。ですから演歌を取り入れたようなインパクトがあったのではないかと思うのですが…。チャールズは、上流階級である大地主の娘さんと結婚しています。そのような人々が、果たして演歌のメロディで歌うことができたのか。やはり、抵抗のある人たちもいたのではないのでしょうか。でも、労働者の人たちにとってはどうだったのかということに興味深いです。

それからもう一つあるのですが、編集された讃美歌集を「貧しい」と言われたメソジスト派の会衆が買うわけですが、いくらぐらいで売っていいものだったのか。大地主の娘と結婚したチャールズは、それなりの生活をしなければならぬのですが、その彼の収入との関係もあるのでしょうか。携帯用としてポケット版の讃美歌集も出ています。それらに関して、北村先生が値段などご存知でしたら教えていただきたいのですが。

北村氏：世界的に広くみても、日本の教会ほど自分の聖書と讃美歌を持って礼拝に出席するところはありません。外国では全部讃美歌は教会の備え付けです。その前は、讃美歌集という歌集もポピュラーではなかったのです。ソングリーダーが教えていたのです。今日は何番ですというのではなく、こういう歌詞を歌いましょうというのがイギリス、スコットランドではそういうアピールをします。案内をします。こういう歌詞、こういう曲で歌いましょうという案内がなされるのです。ところが日本だと、讃美歌何番というだけの場合がほとんどです。固定した歌詞と曲が一つになっていて変更させないというのは日本位ではないかなと思います。

質問者（フローア）：さきほどから讃美歌の大衆化ということが出ていますが、私はある時、福生の米軍基地とか横浜の海軍基地に行ったことがあります。土曜日曜の夕方になると、どこからでてきたのはわからないのですが、時には何百人、多い時には千人もの日本の若者が黒人の兵隊や水兵さんが基地からでてくるのを待っているのです。それから皆行きまして、基地のチャペルとか、横浜、福生の近くに日本人の教会、福音系の教会に入っていって、いつくしみ深きとか、アメージング・グレースを涙を流して歌っているのです。私も何人かの教会の牧師や、大学でクラシック音楽を勉強した音楽家に話したことがあります。ところが、現在では若者と一緒にそのような歌を歌うのが難しいという声を聞きます。私はある教会に行きますと、教会が衰退化して元気がない。原始教会は喜んで歌っていた。チャールズの生きていた時代の教会もそうでした。これについて何か講師の先生方にコメントをいただきたいのですが。

山内氏：私は毎朝起きて、ウェスレーの標準「ジャーナル」を開き、私は72歳ですが、ジョン・ウェスレーの72歳のところを読んでいるのですが、讃美歌のことはあまり出てこないのです。やはり、彼はプリーチャーだったと思います。しかし、一方で、メソジストの群れは **singing people** と呼ばれた。先ほどからのご質問に関係します。

教会史の中でウェスレーをどのように位置づけるかは議論の分れるところで

す。カトリックやアングリカンの線、あるいは、宗教改革やモラヴィア派など敬虔主義の線。いい意味でウェスレーの中にはこれらすべての教派・伝統が流れ込んで統合されたのです。その中で、賛美の持っている意味、ウェスレー兄弟はセンチメンタリズム、甘い旋律に酔うということは警戒したと思います。ただ、さっきからお話のようにイギリスはイギリス、日本は日本で、どういう風にキリスト教の本質を失わないで、土着化を具現するかが課題です。ウェスレーはセンチメンタリズムを警戒しましたが、宗教からセンチメントというものを排除すれば生命をなくすこととなります。そういう意味でウェスレーが若い時から興味を持っていた神秘主義には魅力がある。しかしウェスレーはこれが最後に対決しなければならない相手でもあると言います。ウェスレー兄弟は、一言で言えば、新約聖書のクリスチャンであったと思います。

そして新約聖書の中には旧約以来の伝統を受け継いで賛美の意味と力が証明されているわけですから、日本の教会がメソジストの特色である通常は相対立するものを意味深く統合していくという、細い道ですが、それをウェスレー兄弟に倣って求め続けてゆきたいと思います。讃美の回復もそうです。

深町氏：私はさきほど申し上げたように、日本の若者が日本語で、救われた喜び、天国への希望を歌いあげる。そういう讃美歌があつてはじめて、譬えて言うと、銅鑼がなると自然に横のものが揺れて美しい音色が響くように、教会の中に賛美が満ちると思います。現に、アメリカのメソジスト教会に行くと、礼拝の中で讃美歌がとても重要な役割を持っています。日本の教会は礼拝の中で讃美の声が小さい、下手をすれば、読経のようになってしまうと思います。この間、韓国の教会の礼拝に出席したのですが、もともと音楽が好きであります。賛美が力強いのです。人間には知情意という力があるので、ステンドグラスも大事であり、建物も重要ですが、讃美の在り方をもっと考えていかないといけないと思います。

北村氏：ブラジルで世界メソジストの会議があつて、そこの町の教会の礼拝に出ました。日本の教会と非常に違うのは、日本の教会で賛美するときにはうつむいていますが、ブラジルでは手をあげて歌っていることです。言葉は前方壁

面のプロジェクターでスクリーンに映し出されています。今はマイクを使う時代になっており、ここにも広い壁があるのですが、日本の教会も前を向いて見上げて歌う習慣を持たないだろうかと思っています。

司会（馬淵）：山内先生に伺いたいと思いますが、山内先生のご報告の中に、チャールズの様々な人生の挫折の中から讃美歌の言葉が出てくるとおっしゃっておられたと思います。先生がご存知のチャールズの挫折をもう少し詳しく伺いたいのですが……。

また、なぜジョンはチャールズの詩を讃美歌として使うことに踏み切ったのでしょうか。ジョンは、初期にはチャールズ以外の作者の讃美歌を集めて出版していました。たしか、その際、著作権の問題で訴えられています。そういったことの影響もあるのかなと考える時もあるのですが……。

またメソジストに入る入会条件は、神の迫り来る怒りから逃れたいという思いを持つと記憶しています。それにより、どの教派の背景を過去に持っていたとしてもメソジスト協会に入会できたと思うのですが、しかしチャールズの讃美歌を歌うと、必然的に万人救済説に基づく詩を歌うこととなります。もし、入会はしたが、そのようなことにまで踏み切れず、まだ抵抗を感じる人々（たとえば極端な例としてユニテリアンとしての過去のある人など）が、チャールズの讃美歌を歌うのを拒絶した場合、どうなるのでしょうか。

山内氏：むしろ先生からお聞きしたいくらいです。ユニテリアンとは一線を画し、聖霊の問題も含めて袂を分かちました。

パーソナリティに関して、決して病理的な対象という意味ではなく、多少とも躁鬱の傾向があつたと言われます。チャールズは繊細なタイプで、常に罪責感に苛まれていた。自分の思うところと反対の生き方をしてしまう。だからこそ、キリストの十字架の恵みにより頼む。そこで悪魔的な力と戦っていく。人間の名誉欲、物欲、性欲などさまざまな欲望と戦いながら生きる、そのあり様を真率な信仰告白としての讃美歌に作り上げたのではないのでしょうか。

ジョンがジャーナルを書いたように、彼は韻文で書きまくったのだと思います。やはり、兄弟のタイプが違う。弟は兄さん思いで最後にはジョンを立て、

結婚の問題でもアドバイスを仰ぐのです。しかし、チャールズの方が女性を見る目があつたという説もあります。これを今の問題と結びつける必要はないのですが、ともかく兄弟それぞれ個性的な仕方信仰の証をしたのです。だから、表面的にはいろんな問題で対立があつたにせよ、やはり単なるパートナー以上の絆で結ばれていたと言えます。

質問（フロアー）：メソジストは歌が優れていると言いましたが、なぜ、踊らなかつたのでしょうか。日本でも歌っている時に踊る教派もあります。アメリカ南部の黒人の教会だと踊りだします。それはイギリスだったから踊らなかつたのか。それともアメリカだから踊るのでしょうか。

北村氏：パウロが手紙に書いているように「詩と賛美と霊の歌」が 2000 年受け継がれているのです。自分たちが踊ることによって身体的にも生き活きているというよりも、神への応答、祈りとして賛美をすることが中心であつたと思います。旧約では詩編にもありますが、神の言葉を聞くということと同時に、「詩と賛美と霊の歌」を歌つたのです。それ以上の踊りというのは、それに根ざしていればいいのですが、単なる踊りとしては問題かもしれません。日本語では「歌は訴える」ということから来ていると聞いたことがあります。単なる訴えるということだけでなく、栄光を現すことでもあるのです。そういうことでよろしいでしょうか。

岩本氏：ご存知の上で馬淵先生もおっしゃっていると思いますが、来るべき神の怒りを免れるというように間口はかなり広いのです。でもあんまり入れすぎたので会員券を出さなければならぬということが起こりました。しかし、後半省略されたと思うのですが会規を守つてということですか。

北村氏、日本では讃美歌と言っていますが、もともと讃美歌という言葉で定着したのではなかつたのです。聖歌という言葉もあります。聖公会でも聖歌集とあります。古今聖歌集という言葉もあります。古今和歌集もありますから読めなくはないと思います。日本でも将来的には、讃美歌という呼び方を変える力

も日本の教会から生まれてくるかなと思います。韓国では「賛頌歌」と言い、台湾では「聖詩」と言います。案外、「讃頌歌」がいいのではないかと思います。讃美歌の実体が、一人一人の信仰の中で神の恵みに応えて、神の栄光を現すことになると思います。

藤本氏：この学会の特色として、日本基督教団系とそうでない系が半々位おられます。同じウェスレーを論じるでも主張が違うのがおもしろいことです。昨年も恵みの座ということで特集したのですが、日本基督教団系では恵みの座と言えば、聖餐の時にひざまずく聖餐レールであります。インマヌエル教団では、説教に応えて、自らの献身を表白する為に前に出る献身の場です。同じウェスレーの流れでも、讃美歌の意味合いは違つていたと思うのです。野外で大衆を陶醉させる聖霊の働き、そして讃美歌の歌詞にこめられた神学が人々の心を打つということは、キャンプミーティングを中心とする野外集会がらみの、英国で言うところのプリミティブ・メソジスト、アメリカでいうところのキャンプ・ミーティングでは、そういう意味合いが強かつたでしょう。もう一つは、ウェスレアン・メソジストと呼ばれる、主流派のメソジスト教会は、外の集会を禁じて、だんだん内側の賛美、そこでオルガンを使うか、使わないのかと議論します。最後ウェスレーが亡くなる時に、どんな集会でも聖餐をするのであれば、英国教会のルールに従つて、その順序に従うべしと釘をさします。讃美歌の歌い方もオーソドックスで、以前と変わらないようなものだったと思うのです。つまり、先に述べました陶酔的な賛美とは違つて整然とした歌い方だったでしょう。

私が不思議に思うのは、チャールズ・ウェスレーの讃美歌は両方にあてはまつたということです。オーソドックスに教会の中で歌うのもよし、野外でも歌うのもよし。おそらく野外の場合は短調を使わずに長調だけで歌つたと思いますが。それぐらい、いい詩を状況に合わせたメロディをつけて歌いなおしていったというのがおもしろいと思います。今日の発題者の先生方を聞いていても、野外における伝道の働きを強調された先生も、教会の中での静かな賛美を強調された先生もアプローチはそれぞれでした。そこが、とてもおもしろいと思います。

この会を田添先生や役員の人たちと企画する中で発題の先生方が苦勞される

のではないかと思ったことがあります。一つは、チャールズ・ウェスレーの実像が掴めないということだろうと思います。つまり、歌がレコーディングで残っていないので、なかなか実像がつかみにくいのではないか。もう一つは神学の問題で、果たして讃美歌からどれほど神学を抽出できるのかといことです。

山内先生に質問なのですが、先生が読まれていて、聖霊降臨の問題、回心、讃美歌から神学を抽出する作業する困難さ、讃美歌と神学をどのように組み合わせるのか、何かお考えになったことがあれば、お聞かせください。

山内氏：歌心というか、詞藻が乏しいので、ウェスレーの讃美歌をどれほど深く読み取っているかあまり自信はございません。しかし今回チャールズ・ウェスレーの讃美歌と取り組む機会が与えられたので、今後少しでもチャールズにも集中したいと思っています。神学的なトピックスに関しては、兄ジョンといろんな並行関係があり、そう困難でなく結びつくと思います。今日ご紹介したのもその一部ですが、文学的表現と思想的概念が必ずしもびたっと一致しませんから、そこで何が意味されているかを見抜く洞察力がないと、賛美の神学というか、讃美歌にあらわれているオーソドックスな教理について正確に答えることはできません。

司会（馬淵氏）：学会で活躍してこれ、最近『メソジストって何ですか』という本を出された清水光雄先生がフロアにおられます。一言伺えればと思います。

チャールズの場合上流階級と密接な関係を持っていました。兄のジョンは「貧しい人々」に使命感を持っていただけでなく、貧者のために一日に何回も集会で支援金を会員から募っています。そこまで徹底することはないでないかとチャールズは兄を非難します。また、チャールズは体が弱かったので、療養のためとして海水浴に出かけるようになります。しかし、ジョンの方は、スパルタ的な健康維持方法を採用していた人間でしたので、質素な食事をしていれば健康でいられると、チャールズの行為をたしなめたとされます。ジョンの基準に照らして、チャールズはメソジストだったのでしょうか。先生のコメントをいただければと思います。

清水氏：私は神学しかわからないもので、今日の話は全然わかりません。ただ神学的に言いますと、ウェスレーは **emotion** と **passion** と **compassion** が彼の神学の中心です。チャールズ・ウェスレーはどうかなと考えたら、これも私の読んだ範囲ですが、彼の回心体験があって、やはり体験の神学、経験の神学がありまして、ウェスレーは両方とも **emotion** と **passion** と **compassion** を強調したと思います。ただこれは熱狂主義ではありませんよ。そういうのではなくて、理性を含めた **passion** と **compassion** なのです。そういう形で讃美歌というものが神学的に捉えられていたのではないかと思います。ウェスレーがチャールズのどこを嫌ったのか、削除したのかということで、チャールズは怒るのですが、ジョンとチャールズが同じ讃美歌を作るのです。兄が作った讃美歌を使って、弟も作るのです。同じ題名で違う讃美歌ができるのです。弟も文句言いながらお兄さんについていったと思います。**emotion** と **passion** とか、それが彼らの神学の中心であったとすれば、讃美歌も彼の神学も大変重要な素材だったのだろう。それでジョンは積極的に弟の讃美歌を使ったのだろうと思います。

司会（馬淵）：時間となりましたので、もしまだご質問をお持ちの方がおられましたら、このシンポジウム終了後、個人的に先生方にご質問をお願いいたします。では、最後にお祈りを坂本先生にさせていただきます。

司会（坂本）：私たち主なる神さま、今日もこの素晴らしいひとときを備えてくださってありがとうございます。チャールズ・ウェスレーの生涯、讃美歌、生き様を通して多くのものを学ぶことができました。チャールズの残したものを、私たちは批判的に継承し、また、日本の文脈に合わせて取り込み、彼のスピリットを継承できる者としてください。本日発題してくださった四人の先生方に心から感謝します。豊かな癒しをお与えください。今日参加してくださった方にも神さまの豊かな祝福がありますように。イエス・キリストの御名によって祈ります。